九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Amrubicin monotherapy for patients with extrapulmonary neuroendocrine carcinoma after platinum-based chemotherapy

二尾, 健太

https://hdl.handle.net/2324/1831399

出版情報：Kyushu University, 2017, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

（別紙様式２）

氏　　名	二尾　健太
論　文　名	Amrubicin monotherapy for patients with extrapulmonary neuroendocrine carcinoma after platinum-based chemotherapy
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　中西　洋一 副　査　　九州大学　　教授　　江藤　正俊 副　査　　九州大学　　教授　　二宮　利治

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

肺外神経内分泌癌（以下：extrapulmonary neuroendocrine carcinoma; EPNEC）は稀な疾患であり予後不良である。臨床病理学的な類似性に基づきEPNECに対する化学療法はしばしば小細胞肺癌に準じた治療が行われるが、その効果､安全性に関しては十分な検討はされておらず標準治療は未確立である。本研究では消化器に生じたEPNECに対するサルベージ治療としてのアムルビシン療法について検討した。2005年7月から2013年12月の間、プラチナ系抗癌剤を含む化学療法施行後に、アムルビシン療法を受けた消化器原発のEPNEC患者を対象に安全性と治療効果を後方視的に解析した。関連４医療機関からの13人の患者（男性10名、女性3名、年齢中央値64歳）について検討した。原発巣は胃6名、直腸3名、食道2名、肝臓1名、膵臓1名であった。イリノテカンあるいはエトポシドを含む治療を既に受けた者はそれぞれ10人と6人であった。アムルビシンの初回投与量中央値は40mg/m2/日、3日間であり、治療サイクル数中央値は4サイクル（幅1-9）であった。奏効率は38.5%であった。無憎悪生存期間中央値、全生存期間中央値はそれぞれ107日（幅22-275）、215日（幅71-535）であった。主な重篤な有害事象は好中球減少（84.6%）、発熱性好中球減少症（30.8%）であった。プラチナ系抗癌剤無治療期間が90日以上の患者（感受性再発）は90日より短い患者（抵抗性再発）に比べ、無憎悪生存期間と全生存期間が長い傾向にあった（無憎悪生存期間中央値 190 vs. 63日、全生存期間中央値348 vs. 145日）。

以上の結果、アムルビシン療法はEPNECに対して小細胞肺癌での報告と同等の効果と安全性を示した。更に小細胞肺癌での報告と同様に、この治療は特に感受性再発群の患者に有効である事が示唆された。

以上の成績は臨床データがほとんど存在しないこの方面の研究に一定の知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。